

マイウェイ

No.53
2004

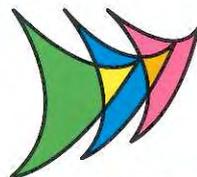
横浜もののはじめ物語

監修 斎藤多喜夫 写真 桜井ロクスケ



財団法人はまぎん産業文化振興財団

平成16年9月発行 ● 発行人 平澤貞昭 ● 編集人 清水照雄 ● 発行 財団法人はまぎん産業文化振興財団 〒220-8611 横浜市西区みなとみらい3-1-1 ☎045-225-2171 (直通) ㈱西北社 大日本印刷 ㈱



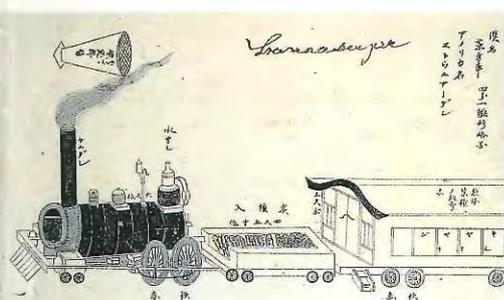
横浜開港150周年
1854年7月3日 - 2004年7月3日

「風を受けて世界へ開く“帆”」をイメージしています。三枚の帆は、グリーンが企業、ブルーが行政、ピンクが市民を表現し、重なり合う二つの三角は“力”と“融合”を表し、1世紀半におよぶ当地の歴史とそこに培われた進取の気質を織り込んでいます。これらが三位一体となり、「夢」という風を受けて未来の横浜を力強く押し上げます。

横浜もののはじめ物語

海辺の小さな村に、ホテルや商館が建ち、公園ができ、鉄道が敷かれ、またたく間に世界の商都へと発展……。

ペリーより贈呈された蒸気機関車の模型（米艦渡来記念図）。※



横浜開港と新文化の伝来 斎藤多喜夫

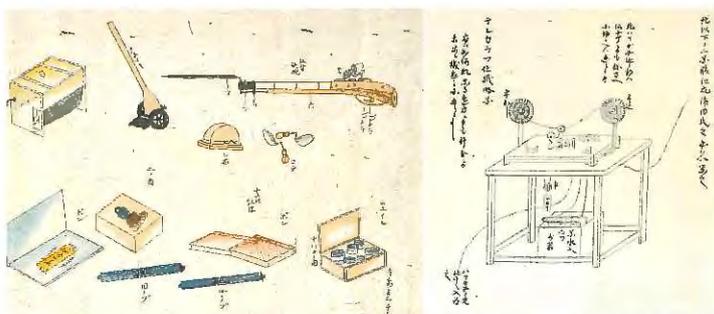
横浜開港資料館調査研究員

日本を変えたペリーの贈り物

今から百五十年前の安政元年（一八五四）、現在の横浜開港資料館の辺りに設けられた応接所で、アメリカのペリー提督らと幕府の代表団が会談、日米和親条約が結ばれました。会談は計四回行われましたが、その間に饗応しあったり、贈り物を交換するなど、日米親善の行事も行われました。日本人にとっては初めて目にす



右／「ペリーの横浜上陸」。ハイネの原画による石版画。安政元年2月10日（1854年3月8日）、ペリーは約500名の将兵を率いて横浜に上陸し、画面左手の応接所で日米会談。※ 左／パイプをふかすペリー（米艦渡来記念図）。※



電信機(右)と、その他のさまざまな贈り物（米艦渡来記念図）。※

るものばかり、応接や警備に当たった武士たちのうち、教養のある人びとは多くの知識を持っていただけに余計、実物を見ることに知的興奮を覚えたことでしょう。筆まめな彼らによって多くの記録やスケッチが残されています。

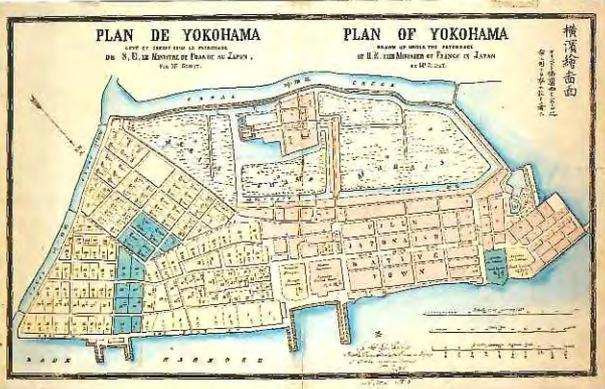
なかでも評判となったのが、アメリカからの贈り物のうち、四分の一の模型ながら実際に走ってみせた蒸気機関車、一瞬のうちに言語が通じる電信機でした。やがてこれらの文明の利器が日本社会に採り入れられ、重要な役割を果たすようになることを、彼らは予感していたでしょう。京浜間に電信線が架設されたのは、それからわずか十五年後の明治二年（一八六九）、同じく京浜間に鉄道が開通したのは十八年後の明治五年のことでした。

表紙／三代広重画「横浜海浜鉄道蒸気汽車圖」 横浜開港資料館所蔵。裏表紙／馬車道通りに復元された日本物のガス灯。※印の図版は横浜開港資料館所蔵のものです。（P2～15）

上／横浜開港資料館（も）と英国領事館（と）中庭の玉桶の樹。下／資料館隣には日米和親条約締結の記念碑が。



横浜最初の本格的実測図「横浜絵図面」M・クリベ作成、慶応元年（1865）。※



上／鳥居製鐘樓が付設された「横浜天主堂」三代広重画。※
下／明治後期の旧居留地本町通り（絵巻書）。※



さいとう・たきお／1947年、横浜生まれ。東京都立大学大学院修士課程修了。現在、横浜開港資料館・横浜都市発展記念館調査研究員。共著に「F・ペート幕末日本写真集」「横浜もののはじめ考」ほか。著書に「幕末明治 横浜写真館物語」など。

外国人居留地の果たした役割

ペリー来航は、日本人に西洋の文物を見ずる機会を与え、強烈な関心を呼び起こしましたが、直接それらの摂取に結びつくものではありませんでした。それにはやはり安政六年（一八五九）の横浜開港を待たねばなりません。神奈川宿の近くか、横浜か、港の位置をめぐる外国との対立が解消をみた翌万延元年初頭から、横浜での外国人居留地の建設が本格化すると、ここに西洋の小都市を思わせる外国人の街ができて、さまざまに西洋文化の摂取、すなわち「もののはじめ」の諸事象が生まれます。

また、明治維新後、新政府が「殖産興業」を旗印に、積極的に西洋の技術を採用入れた際も、横浜の外国人居留地は大きな役割を果たしてい

ます。技術者の雇用や資材の輸入などに居留地の銀行や商社が活躍したのです。電信や鉄道はその成果物であるとともに、殖産興業政策を支える人と物と情報の流通の動脈でもありました。電信や鉄道などは「官」の手で生み出された「もののはじめ」です。「横浜もののはじめ考」（横浜開港資料館、一九八八年）という本をまとめた時に取り上げた項目でいうと、港と町づくり、運輸・通信なども、おおむね「官」に属する事業です。一方、ホテル、洋食文化、娯楽、スポーツや、新しい職業・産業などは「民」に属する事項です。それらには、進取の精神だけを頼りに居留地に飛び込み、新文化と格闘してそれをものにした、多くの庶民のサクセス・ストーリーが含まれています。「もののはじめ」が人気を失わない理由の一つがその辺りにありそうです。

横浜もののはじめグラフィティ

各項目は、「横浜もののはじめ考」(横浜開港資料館)を参考に作成しました。

鉄道

文明開化の幕開けを飾った蒸気鉄道。



かつては横浜駅があった桜木町駅の近くに建つ「鉄道発祥の地」碑。



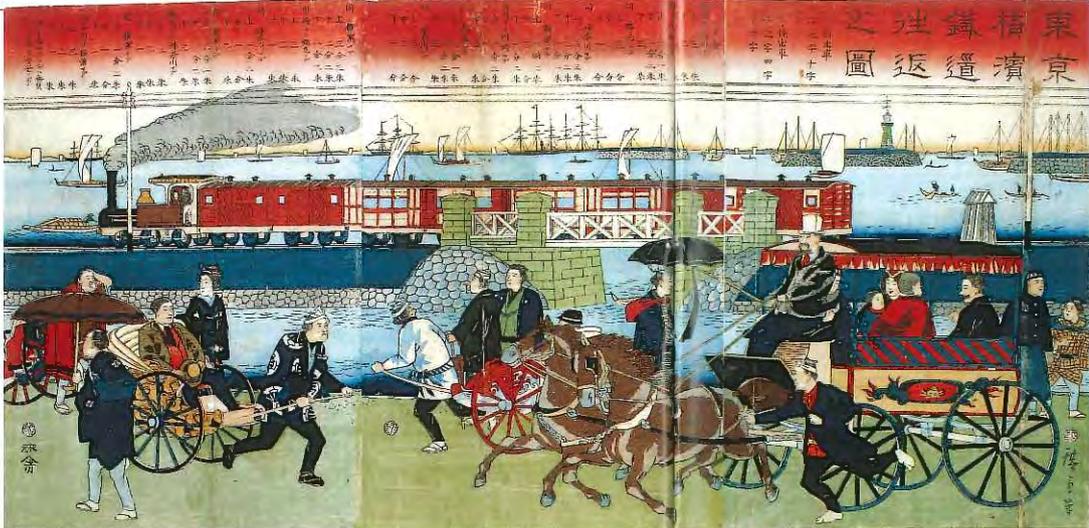
日本で初めて輸入されたのはイギリス製の「1号機関車」交通博物館所蔵。

自転車

鉄砲鍛冶が活躍したといわれる自転車黎明期。



「横浜開港資料館」5編(慶応元年)に描かれた三輪自転車に乗る婦人。※



三代広重画「東京横浜鉄道往返之図」明治6年。馬の博物館所蔵。

日本で最初に鉄道が開通したのは明治五年のことでした。この年の五月七日に仮営業が開始され、横浜―品川間を走破。この様子を「横浜毎日新聞」は、「あたかも人間に羽翼を付して空を翔けるに似たり」と報じています。その後、線路は延長され、四カ月後の九月十二日(陽暦に直すと十月十四日)で、この日が鉄道記念日となる。横浜―新橋間、二九キロが全線開通しました。開業式には明治天皇が臨席し、横浜市内には十五万張りの提灯が飾られ、五千人の見物客が繰り出したといわれます。

鉄道建設工事の指揮に当たったのはイギリス人技師エドモンド・モレル。JR桜木町駅(当時の横浜駅)のコンコースにモレルのレリーフが飾られています。



上/梶野自転車商店前(明治41年頃の写真)。右/明治10年頃の製造と伝えられる国産第1号の自転車。自転車文化センター所蔵。



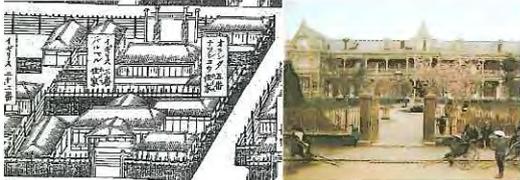
クの付いた自転車が登場し、本格的な自転車の時代を迎えます。

日本に入ってきたのは慶応年間とのこと。明治十二年に横浜・蓬萊町に国産初のメーカー(梶野自転車商店)が誕生します。当時、自転車の製造に腕をふるったのは、かつての鍛冶職人たちが、鉄砲を作る技術が自転車のフレームづくり役に立ったといわれます。



二代広重画「横浜海岸
通十八番異人旅宿之図」刊年不詳。明治元
年開業のインターナシ
ヨナル・ホテルを描い
たもの。※

左/「御開港横浜大絵図二編 外国人住
宅図」に描かれた横浜ホテル。「ナッショ
ウ住家」と書かれたところがホテル。横
浜都市発展記念館所蔵。右/明治23年
に建てられたグランド・ホテル新館。※



ホテル

シーボルトやバクーニンも
泊まった「横浜ホテル」。

開港から数カ月後の万延元年（一
八六〇）二月、横浜で最初のホテル
が開業。名称は「横浜ホテル」。上
海の英字新聞「ノース・チャイナ・
ヘラルド」の三月十日号には、「公
衆の長い間の渴望に心えて開業」と
さも誇らしげな広告が掲載されまし
た。居留地を訪れる外国人たちは
年々多くなり、そんな彼らの悩みの
種が宿泊施設でした。

ホテルの経営者は、オランダ船籍
の帆船ナツソウ号の元船長フフナー
ゲル。宿泊客の中には、医師シーボ
ルト父子や、亡命中のロシアの革命
家バクーニンの名もあります。

カフェテリア

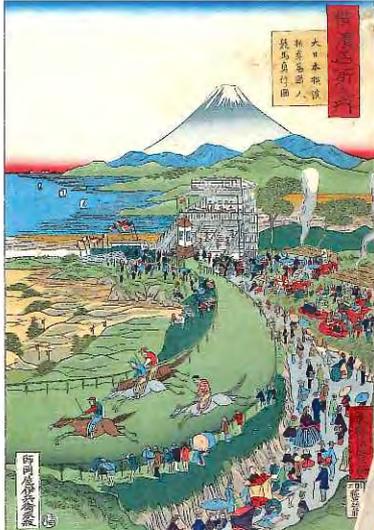
開港当初にコーヒー豆が輸入され、
カフェテリアが続々オープン。

元治元年（一八六四）三月、横浜居
留地内に最初のカフェテリアがオーブ
ン。「アリエ・カフェ」という店でし
た。これに続いて、続々とコーヒー・
ハウスが開店。

この年、外国人
遊歩新道が開通
すると、翌年さ
つそくコーヒ
ー・ハウスが出
店し、坂の上は、
コーヒー・ハウ
ス・ビルと呼ば
れました。



コーヒー豆を扱った婦人
「横浜開港員聞誌」5編
（慶応元年）より。※



慶応元年（1865）、山手練兵場
で行われた日本人士官によるレ
ースの様様（『絵入りロンドン・
ニュース』に掲載）。※

競馬

語り草かたごゝになった日本人ジョッキ―。
西郷従道の初優勝。



上/永林信実「横浜名所之内 大日本横
浜根岸万国競馬興行ノ図」明治5年。
右/曲馬もまた、明治元年（1864）、
横浜で最初に興行。歌川芳虎「中天竺
舶来之輕業」。馬の博物館所蔵。

居留地に住む外国人たちの手で、
日本で最初の洋式競馬が行われたの
は、万延元年（一八六〇）、場所は
現在の元町の辺りといわれます。二
年後には、造成中の旧横浜新田で、
より本格的なレースが開催され、そ
して慶応二年（一八六六）、根岸の
丘に日本初の近代競馬場が完成する
や、競馬ブームに火が付きまします。

明治八年、日本人初の横浜レー
ス・クラブの会員となった西郷従道
（西郷隆盛の実弟）が、愛馬ミカン
にまたがり、八〇〇を一分三秒で
走り、日本人で初めて優勝したこと
は語り草になりました。

ボート

国際ボート・レースは、
日本人と居留外国人との間で展開。

ボートも競馬同様、幕末の居留地で
盛んだった娯楽のひとつでした。文久
三年（一八六三）に、駐屯軍の将兵を
中心に開催されたのが最初のボート・
レースで、その
後、明治十八年

十一月三日、東
京帝国大学の学
生チームと居留
外国人のチーム
とで行われたレ
ースが、国際ボ
ート・レースの
始まりです。



オープニング時のボ
ート・ハウスの光景。明
治14年6月。※

新聞

日本初の邦字新聞は、
外国新聞を翻訳した木版和綴本。



上/日本で初めての邦字日刊紙「横濱毎日新聞」は、明治3年に創刊。明治12年に、「東京横浜毎日新聞」と改題し、全国紙へと発展して行きます。※
右/「日本国新聞発祥の地」碑。ジョセフ・ヒコの肖像がレリーフに。

幕末・開港期の横浜では、「ジャパン・ヘラルド」や「ジャパン・ガゼット」など、居留外国人向けの新聞が相次いで発刊される中、元治元年（一八六四）にジョセフ・ヒコ（浜田彦蔵）により日本初の邦字新聞が創刊。その名も「新聞誌」（翌年「海外新聞」と改題）。これは外国の新聞を翻訳した木版和綴本。その後、明治三年に、日本初の日刊邦字新聞「横濱毎日新聞」が登場。輸出入の情報や商館の広告などで構成された経済情報紙で、鉛の活字を用いた画期的なものでした。

和英辞典

「聖書」を和訳する夢が、
ヘボン式ローマ字へと。



上/「和英語林集成」初版本。
慶応3年（1867）に刊行。※
左/「ヘボンよ、永遠に」と、ヘボンの業績を讃えたビゴーの漫画。※



安政六年（一八五九）、キリスト教の宣教師・医師として来日したヘボンは、神奈川の成仏寺に滞在。その後、施療院を開設し、献身的な治療活動を続けました。ヘボンの夢は「聖書」を和訳すること、そのためには日本語の習得が必須。そんなヘボンが、八年がかりで編纂したのが「和英語林集成」でした。
ヘボンの頭を最も悩ました日本語のアルファベット表記が、「ヘボン式ローマ字」と呼ばれ、現在のローマ字の原型になっていることは、あまりにも有名です。

写真

日本最初の職業写真家はだれか。
写真史の謎が解明された！



右/「佛蘭西」写真画・文久元年。上/日本写真の開祖といわれた下岡蓮杖。写真館を営業していた40歳代のもの（「アサヒグラフ」写真百年記念号、1925年より）。※



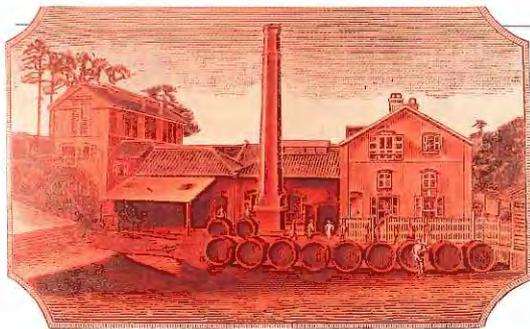
右/ステレオ写真。2つのレンズで同時に2枚の写真を撮影し、ビューワーで見ると立体的に見える（岡コレクション）。※ 左/F・ベアトの彩色写真。※



馬車道には「日本写真の開祖 写真師・下岡蓮杖顕彰碑」が建っています。下岡蓮杖は、アメリカ人のウンシンというカメラマン（最近、ウンシンがセミプロのカメラマン、ジョン・ウイilsonであることが判明）より写真術を学び、ウイilsonからカメラを譲り受けて独立し、写真館を開設。顕彰碑には、「一八六二年（文久二年）横浜に写真館を開く」と記されています。ちなみに同じ年に長崎で上野彦馬も写真館を開いています。しかし、その後の研究で、日本で最初の職業写真家が蓮杖ではなく、居留地で雑貨商を営んでいたアメリカ人のフリーマンであることが分かってきました。
斎藤多喜夫氏の著書「幕末明治 横浜写真館物語」によると、フリーマンが輸入した写真機を用いて、数カ月間、写真家として肖像写真を撮影したとのこと。このフリーマンから作品と仕事を譲り受けたのが鶴飼玉川という人でした。フリーマンは一八六〇年に開業し、翌年、玉川は江戸・両国で開業。一年違いとはいえ、日本人で最初の職業写真家は玉川で、蓮杖は横浜最初の日本人写真家ということになります。

ビール

「ビアザケ」と呼ばれた
日本最初のビール。



明治18年頃のジャパン・ブルワリー。
写真提供/キリンビール(下のラベルも)。

キリンビール発売時のラベル。翌年、デザインを変更して麒麟に。



昔から横浜では良質の清水が湧くことが知られていました。それに注目した外国人によりビール醸造が始められました。
まず、明治二年に、山手に「ジ



山手外国人墓地にあるコーブランドにあるコーブランドの墓。墓前にビールが供えられている。

ヤパン・ヨコハマ・ブルワリー」という醸造所が建設されますが、長続きせず、翌年ウィリアム・コーブランドというアメリカ人が山手の天沼に、「スプリング・ヴァレー・ブルワリー」を創設。製品は「ビアザケ」という名で親しまれました。ビール産業の始祖とされているのが、このコーブランドです。その後、明治十八年には、コーブランドの工場の跡地に「ジャパン・ブルワリー」が設立され、総代理店となった明治屋が、製品名を「キリンビール」として全国に販売します。

牛乳

曲芸師リスレーが居留地で創始。日本人の間でも乳牛飼育がブームに。

元治元年（一八六四）、曲馬団を率いて横浜にやってきたアメリカ人の曲芸師リスレーが、横浜で最初の牛乳業者でした。慶応二年（一八六六）にアメリカから乳牛を連れてきて牧場を開き、搾乳業を始めます。

その後、中川嘉兵衛をはじめ、多くの日本人が牧場経営に乗り出しますが、その中には写真家の下岡蓮枝もいました。



明治37年頃の牧場の広告。
牧場主は石川要之助。※

パン

日本人が焼いた「焼き饅頭」のようなパンの味は意外と好評！



右/アメリカ人パンを焼くのは芳員画・文久元年。※上/ウチキパンの創業者・木彦太郎。※

横浜で最初にパン屋を始めたのは日本人でした。万延元年（一八六〇）、内海兵吉という人が、フランス軍艦の乗組員から手ほどきを受けて、見よう見まねでパンを焼いたといわれています。内海の談話によると、「パンだか焼き饅頭だか何だかわけのわからない物」でしたが、よく売れたとのこと。
その翌年、グッドマンという人がヨーロッパ風のパン屋を開店。数年後に、イギリス人のロバート・クラークが「横浜ベーカリー」を創業。「ウチキパン」へと受け継がれてゆきます。

氷とアイスクリーム

天然氷を使った、飛びきり高価なアイスクリーム。



「太陽の母子」(アイス
クリーム発祥の碑)。

明治半ばの「氷水店」の店頭風景(ビゴー「東京芸者の一日」より)。※

開港当時の横浜では、ポストンから喜望峰回りで六カ月かけて運ばれた高価な天然氷を輸入してホテルのレストランで使用。リスレー(もと曲馬団の団長)が天津氷を輸入して、アイスクリーム・サロンを開業したのは慶応元年(一八六五)のこと。
日本人では中川嘉兵衛が函館氷の切り出しに成功し、明治元年に横浜に氷会社を設立。翌年六月、町田房造が馬車道に「氷水店」を開店し、「氷又はアイスクリーム」を販売。氷水とは、氷をカンナで削った飲み物だったようです。

クリーニング

最初は小川の中の丸い石に衣類を叩きつけて洗濯！



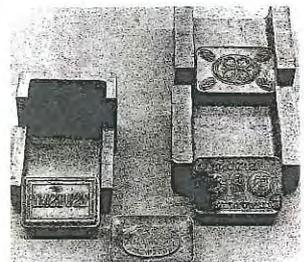
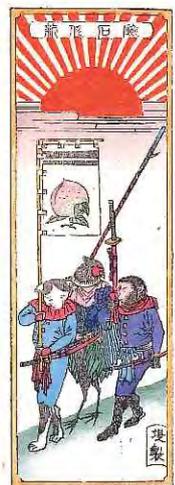
右/センドクをする婦人(万延元年「西洋万国図」より)。* 上/クリーニング業発祥の地。

クリーニングは、開港後の横浜を代表する職業のひとつです。居留地の外国人の数が増えるに従い繁盛し、のちに市会議員を務めた脇沢金次郎のように一代で財を築いた人も少なくはありません。

元祖とされる渡辺善兵衛は熊本の人で、長崎で西洋式の洗濯法を覚えた後、横浜に出て、太田町八丁目(現在の中区山下町)に開業。文久年間(一八六一〜六三年)とのこと。当初、善兵衛は、店の前を流れる小川の中の大きな丸い石に衣類をたたきつけて洗濯したといわれています。

石鹼

たび重なる失敗の末に完成した国産初の洗濯石鹼と化粧石鹼。



右/「桃太郎」をデザインモチーフにした製石鹼のラベル。* 上/印刷師が製作した石鹼の型。*

初めて国産の石鹼が作られたのは明治六年のこと。横須賀の製鉄所で働いていた堤磯右衛門

が、フランス人技師ポエルから石鹼の製法を伝授されたのがきっかけでした。磯右衛門は三吉町(現在の南区万世町)に製造所を興し、苦心の末に洗濯石鹼と化粧石鹼の製造に成功。その後、塩水でも使える海水石鹼やコレラ予防の石炭酸石鹼を売り出しています。

理容

断髪令で結髪師たちは理容師に転向。

元治元年(一八六四)に「横浜ホテル」内に開店した、ヨーロッパ人によるヘア・サロンが、横浜で最初の理容室。その後、明治四年に断髪令が出されると、日本人の結髪師たちは、ぞくぞくと理容師へ転身。元祖とされる小倉虎吉は、異国船に出入りするうちに西洋の理容師のハサミの使い方を覚えて、明治一、二年頃に、「散髪床」を開いています。



カミソリで髭をあたる散髪師(「時事新報」明治31年8月7日号)。*

洋裁

手縫いの時代からミシンの時代へ。

アメリカでミシンが生産されるのは一八五三年頃、その後、日本にも入り、文久三年(一八六三)、英国人のピアソン夫人が居留地にドレス・メーカーを開業。これが洋裁業の始まりです。日本人では、宣教師ブラウンの夫人のもとで働いていた沢野辰五郎という人が、足袋職人から転身して洋裁店を開業したのが最初といわれています。



上/洋裁をする婦人(芳員画・万延元年)。* 左/日本洋裁業発祥の地。

マッチ

明治末には世界有数のマッチ生産国に。

横浜・弁天通りに住む持丸幸助がマッチ製造の元祖。明治八年、アメリカから機械を取り寄せて製造を始めたのが最初。その後、マッチの製造所は林立し、明治末には、日本はアメリカ、スウェーデンと並んで、世界三大マッチ生産国にまで成長。当時、生産量の八割が海外に輸出されていました。



輸出先国の神話や伝説をモチーフにしたラベル。提供/藤井友樹

横浜もののはじめ地図

●印は、○○発祥の地を示す記念碑など。●印は、その他の横浜の歴史にかかわる史跡などを。



「日本国新聞発祥の地」碑。

日本写真の開祖
下岡蓮丈顕彰碑。



日本で最初的气体。



ヘボン博士邸跡。



近代街路樹発祥の地。



日本初の公園（横浜公園）をはじめ、街づくりに貢献した英国人技師リチャード・ヘンリー・プラントンの胸像。



日本初の近代水道（横浜水道）を敷設した英国人技師ヘンリー・スペンサー・パーマーの胸像。

上左/横浜屋蒔田店のワインコーナー。上右/お勧めのワインを手にする三枝さん。中上/横浜らしいハイカラな雰囲気蒔田店。中下・右/地下の酒類倉庫。中下・左/各地の銘酒を揃えた日本酒コーナー。下右/ボルドーで訪ねたワイン店のオーナーと。下中/おしゃれな店内ディスプレイ。下左/ワイン樽が並ぶシャトーの貯蔵庫。



海外派遣団員が語る⑩
ヨーロッパのワイン文化の
奥深さを、多くの人に伝えたい。
横浜市南区 横浜屋 三枝芳光さん

ワインの本場、ボルドーへ

平成十四年に、(財)はまぎん産業文化振興財団主催の商業従業者海外派遣団に参加しました。

上司から「応募してみないか」と言われて、視察先がローマ、パリ、ボルドーと聞いた時には、正直、心が躍りました。私の仕事は酒販店の営業です。それもレストラン部門でワインを担当していますから、一度はワインのメッカを訪ねてみたいと思っていました。ですから、参加できることが決まった時は、夢が叶ったと思えましたね。そ

れに、私の希望を取り入れていただいで、ボルドーのシャトー(葡萄の生産から瓶詰め作業までを一貫して行っている生産者)を訪ねることもできましたし、まさに願ったり叶ったりの視察旅行でした。

ワインは歴史を味わうもの

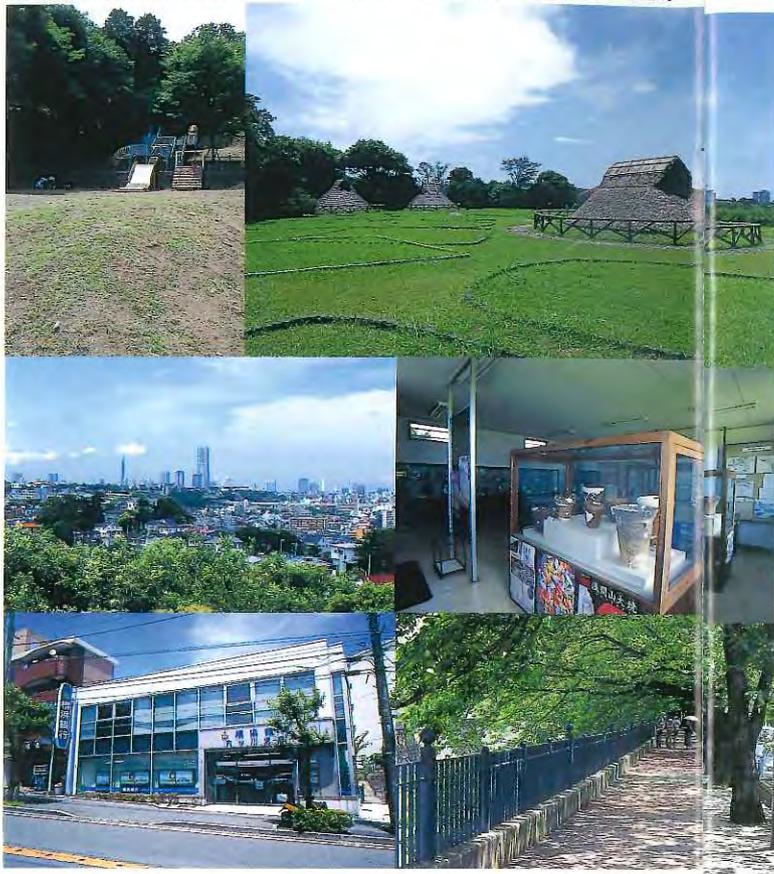
ローマ、パリと訪れて、最後の視察地のボルドーに着くと、私たちは、さっそく街の中心街にあるワインの専門店を訪ねました。「ラヴィノテーク」という店です。この店はワイン販売の激戦区にあるだけに、商品の品揃え、

品質管理から顧客サービスまで、あらゆる面で徹底していました。

たとえば、週に二、三回は、従業員を交えてワインのテイスティング(試飲)をしているとのことでした。お客様にお勧めするワインの品質を確認しておくためです。もちろん、うちでも品質管理を怠ることはありませんが、ここまではなかなかできません。さすがワインのプロだなと感じましたね。

また、お客様の過去の購入履歴や好みの料理なども、きっちりと把握しています。ですから、予算に応じて、料理に合ったワインをすぐに提供するこ

上右と、その下／三殿台遺跡（国指定史跡）。縄文・弥生・古墳時代の3代にわたる集落跡で、敷地内には復元住居や出土遺物の展示館がある。上左と、その下／花見の名所として知られる弘明寺公園。展望台からはランドマークタワーが見える。下右／大岡川沿いに整備されたプロムナードはウォーキングに最適。下左／横浜銀行六ツ川支店。



とができます。うらやましいことに、リースデー・ワインテージ（誕生年に造られたワイン）も豊富に揃えています。なにしろ、子どもの生まれた年のワインを記念に購入して、子どもが二十歳になるまで大切にしておくと、いうお手柄です。以前、私の上司が「ワインは歴史を味わうもの」と言っていました、その言葉を思い出しましたね。

自分の体験を、お客様に伝えたい

翌日、待望のシャトーを視察しました。五五珍という広大な葡萄園を所有

するシャトーです。ちょうど収穫が終わったばかりで、葡萄畑には人の姿がありませんでした。しかし、この葡萄畑で一年がかりで丹精こめて作られた葡萄を、千人以上の人の手で、一カ月半もかかって収穫して、その後ワインになるまでに一年から二年の時を経て、さらに飲み頃になるまでには何年も置いておく。その年月を思うと、なんだか気が遠くなりそうでした。

ここではワインづくりのプロセスをうかがった後、とっておきのシャトーワインを試飲させてもらいましたが、グラスに注がれたワインに対して、心

の中で思わず「ありがとう」と。本当ですよ（笑）。まさに、「百聞は一見にしかず」の体験をさせていただきました。

今は、そんな自分の体験をできるだけ多くのお客様にお伝えしてゆくことが仕事だと思っています。たとえば、和食のメニューに合うワインを和食店さんに提案するとか、できることからやってみて、ワイン文化の裾野を広げてゆくことが大切です。そして、いずれば、自分でワインの買いつけができればと、夢のようなことを考えています。

（談）



横濱屋蔦田店 ● 横浜市南区宮元町4-93 / 横浜市営地下鉄線・蔦田駅より徒歩3分 / ☎045-712-2670、FAX045-716-5154 / 営業時間 10時～23時 / 無休

三枝芳光（ささきよしみつ）●昭和49年、横浜市生まれ。高校時代にアルバイトで横濱屋に勤め、大学卒業後、入社。現在、酒販事業部で営業担当。

※（跡）はまぎん産業文化振興財団では、事業の一つの柱として、平成元年より神奈川県内の商業従業者の方を対象に「神奈川県商業従業者海外派遣事業」を主催。海外の商業文化を視察する機会を提供しております。

ホール

〈はまぎんホール ヴィアマールからのお知らせ〉
ホール利用のご案内

ヴィアマールは、イタリア語で「船便」の意味。広く世界へつらなる文化、芸術をお届けするホールでありたいという願いをこめ、名づけました。みなとみらいに建つ横浜銀行本店ビル一階にあり、ジャンルを問わず、コンサート、講演会などにご利用いただけます。

施設概要

- ホール 客席数517席（前舞台使用時490席）
 - 使用時間 9時～22時まで
 - 使用料金 基本料金、技術者料金、付帯設備使用料の合計。基本料金は、1日を3区分に設定、平日1区分6万3千円。
 - 休館日 月曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始、5月3日～5日
 - お問い合わせ・お申し込み先 ヴィアマールホール事務室（銀行営業日の10時～16時） ☎045（225）2173
- 横浜市西区みなとみらい3-1-1 横浜銀行本店1階

VIA MARE



はまぎんホール ヴィアマール



<http://www.yokohama-viamare.or.jp/>
 ※「マイウェイ」へのご意見・ご要望は
info@yokohama-viamare.or.jp
 へお気軽にお寄せください。

〈はまぎん〉からのお知らせ
**「年金」電話相談サービス
 （無料）のご案内**

年金制度や年金請求の手続き方法など、年金に関する疑問に何でもお答えいたします。また、年金に関連した雇用保険制度、健康保険制度についてのご相談や「年金教室」のお申し込みも承ります。お気軽にお電話ください。

●〈はまぎん〉年金デスク

☎0120(3334)089

●相談受付日 銀行窓口営業日

●相談受付時間 9時～17時

編集後記

横浜の地で、一八五四年三月に日米和親条約が結ばれてから、今年でちょうど開国百五十年。この五年後に開港を迎え、横浜を通じて伝えられた西洋文明が日本の社会に一大変革をもたらしました。今回の「マイウェイ」は、開国百五十年にちなんで、横浜を発祥の地として伝えられた文化や産業などを紹介する「横浜もののはじめ物語」を刊行いたしました。編集を進めるにつれて、「これもそうか、あれもそうだったのか」と、横浜を発祥とするものの多種多彩さに感嘆するとともに、日本の近代化の礎を築いた横浜の足跡の大きさを再認識しました。一介の寒村から西洋文明の新しい息吹を取り入れて大都市に発展した横浜、その個性ある歴史の経緯が横浜独特の伝統や文化を形づくっているのではないでしょう

か。そして、その伝統や文化を受け継いでいくこと、それは私たちに課せられた務めであるにちがいありません。

巻末には、もののはじめの発祥の所在地を示す地図も併せて掲載いたしました。その多くは、長い歳月を経て、記念碑などにその面影を残すだけになっておりますが、散策を兼ねた文明開化の足跡探訪にご利用いただければ幸いです。

最後になりましたが、監修をいただいた横浜開港資料館の斎藤多喜夫氏をはじめ、取材にご協力いただきました関係者の皆さまに厚く御礼を申し上げます。

財団法人はまぎん産業文化振興財団
 事務局長 清水照雄

●次号予告(12月下旬刊行)
「かながわアジア料理物語」